

いま手渡したいこと

子どもたちに文化を

教師にあこがれと自由を

前回私は、(教師のしごととは、子どもの抱える悲しみを深く理解しつつ、同時にそれを乗り越えるための糧になるような、値打ちのある文化を手渡すことだ)と述べました。私にとってこの規定は、多くの先輩たちの教育実践から学んできたことを私なりに集約した、とても大切な表現です。けれども、これを(教師のしごとは、日々の授業を通して、子どもたちにもものを教えることだ)と言い換えてしまえば、それはあまりにも常識的な認識だということになってしまいかも知れません。

いや、むしろ逆でしょうか。「何を教えるか」は、学習指導要領や教科書によってあらかじめ決められていると言わざるをえないわが国の学校教育、とりわけ通常の学級の状況を考えれば、「悲しみを乗り越える糧になるような、値打ちのある文化を」などと言われても、若い先生にはピンとこない、という方がリアリティがあるのかも知れません。私たち自身の学校体験を振り返ってみ

ても、他者との競争のなかで、少しでも早く、上手に、たくさんの「正答」を導くことを強いられ、その結果によって、自分の価値や将来の可能性を値踏みされるといった経験の方が多く、学校での学びが「生きる糧」になるなどと言うのは、空虚な理想論のように響くことすらあるかも知れません。

しかし、それでも私は、学校における教育活動の主要な舞台である「授業」が「子どもに文化を手渡す」ようなものとなり、その積み重ねが、子どもたちに「悲しみを乗り越え、生きる糧を手渡す」ような質をもつものになっていかなければ、教師が「子どもの味方になる」ことはおぼつかないと思うのです。では、そのためには、授業、とりわけその主たる素材としての教材をどのような考えればよいでしょうか。

『歩きはじめの算数』に学ぶ

唐突ですが、「未測量」ということばをご存知でしょうか。「測量」ということばは耳に馴染みがあるので、はじめてこのことばに触れた人は「未/測量」と読んで、「測量していないこと」と理解するかも知れません。もちろんそういう用法もあるでしょうが、ここで紹介する「未測量」は「未測」の「量」、すなわち「未だ測られていない/量」のことを言います。養護学校義務制を準備した1970年代において、知的障害のある子ども

の算数・数学教育に大きな革新をもたらした概念です。小学校一年生の算数の教科書を見ると、その内容は、1から10までの数の理解(一対一対応による個数の把握と数詞、数字、10までの数の構成など)から始まって、一学期の間に繰り上がりのない足し算、繰り下がりのな

第6回

「ほんもの」を選び、本質を手渡す



かしの かずゆき / 1964年生まれ、奈良教育大学教授。専門は障害児教育学。全国障害者問題研究会副委員長、研究推進委員会委員長。著書に『子どもからはじめる算数—すべての子どもに学ぶ喜びを』(共著)(全障研出版部、2017年)など。

奈良教育大学
越野和之

い引き算、10より大きい数へと進み、さらに時刻の読みや長さ、体積などをはさみながら、二学期半ばには、繰り上がり・繰り下がりのある足し算・引き算へと進みます。二年生では、一学期に足し算・引き算の筆算、二学期になるとかけ算九九が学習の課題となります。

算数・数学の入門期の内容をこのようなイメージで考えると、その出発点は「1から10までの数の理解」ということになります。認識がここに留まれば、発達に遅れのある子どもに対しても、まず1から5までの数、それがわかれば10までの…と発想することになります。そうは言っても、障害のある子どもの場合、なかなかこうした学習が定着しないことも多く、そうするとフラッシュカードやプリント学習で繰り返し訓練する、という発想になりがちです。他方で、そうした学習が形式的にも成り立たないような子どもの場合、「この子には算数は無理だ」と判断することにもなりかねません。

1960年代の後半、知的障害のある子どもたちのための教育内容の研究を進めた東京都立八王子養護学校では、数学者であり、革新的な算数・数学教育法(「水道方式」)の提唱者でもあった遠山啓さんの参加を得て、右のような算数・数学の教育内容のイメージを大胆に刷新する問題提起をおこないました。先の「未測量」という概念も、そこで提起されたものです。遠山さんと八王子養護学校は、小学校一年生以降の学習内容が成り立っていく基盤となる認識とはなにかを問うなかで、数の認識の背後には量の認識があること、それは、ある測定単位を用いて数値として把握・表示される以前に、「未測量」という水準(大きい—小さい、長い—短い、重い—軽い、多い—少ないなど)で認識されること、数の理解はこの「未測量」の認識に基礎づけられていることなど